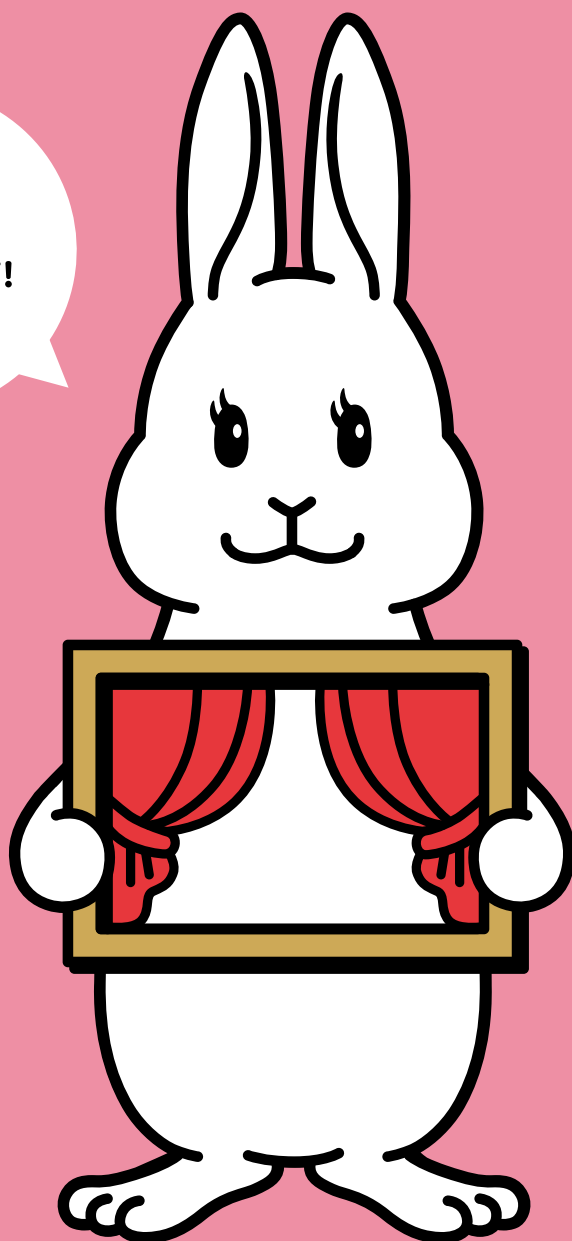


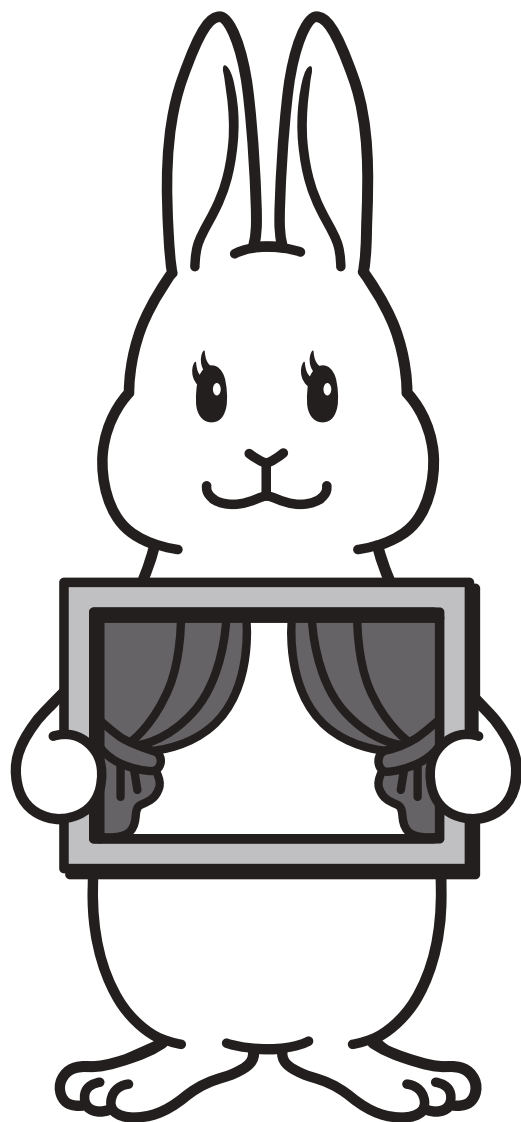
CarroMag.

団地で
ワークショップ!



ワークショップ・レポート
「だれでも表現クラブ・極楽」
「だれでも写真クラブ・極楽」

『キャロマグ』ってなに？



三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、ちょっとややこしいのですが、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、世田谷パブリックシアターの活動はこうした劇場での上演活動に留まりません！

3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。キャロマグは、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期で紹介する冊子です。オレンジ色のキャロットタワーにある劇場の冊子だから、キャロットマガジン。それを短くしてキャロマグ（CarroMag）。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。一気にいろいろご紹介はできませんけれど、これをお読みのみなさんに、少しずつ世田谷パブリックシアターの活動を知って頂きたいと思っています。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。



バックナンバーはこちらからお読みいただけます。

<https://setagaya-pt.jp>（「ワークショップ・レクチャー」から「出版物ほか」にお進みください）

CarroMag.

Vol.18 | Mar.2022

CONTENTS

ワークショップ・レポート

「だれでも表現クラブ・極楽」 「だれでも写真クラブ・極楽」

はじめに 2

区内施設連携プログラムのビジョン

恵志美奈子（世田谷パブリックシアター学芸）

下馬地区アートプロジェクト 4

「だれでも表現クラブ・極楽」「だれでも写真クラブ・極楽」 その始まりと実施一覧

座談会 11

福祉とアートが手を携えて地域の課題にアプローチする

中尾有紀子（世田谷区社会福祉協議会職員）、大塚一恵（下馬あんしんすこやかセンター職員）、
恵志美奈子（世田谷パブリックシアター学芸）

進行役エッセイ 16

「人と人の新たなつながりの端緒」花崎攝

「まるで人生賛歌」開発彩子

「写真と日記はすべておもしろい」金川晋吾

参加者の感想 18

CarroMag. Information

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 20

学芸スタッフから

おまけマンガ『たまにはこんな役 #18』

編集後記

区内施設連携プログラムの ビジョン

恵志美奈子（世田谷パブリックシアター）

持続可能なプロジェクトを目指して

今回特集する「だれでも表現クラブ・極楽」と「だれでも写真クラブ・極楽」は、世田谷パブリックシアターが「区内施設連携プログラム」として行なっている事業だ。世田谷区内の小中学校等の学校や、区内の非営利組織や団体などから依頼を受け、抱えておられる課題、やりたいこと等を伺いながら、演劇の専門家として演劇を活用するアイデアを提案して、事業を共に実践していく。劇場と依頼くださった学校や組織・団体は「協働パートナー」という位置づけであり、また、事業を始めるきっかけとして、劇場に何か一緒にやりたいと「主体的に申し込み」をしてくださることを重要視している。

このような「区内施設連携プログラム」のかたちを考えるようになったきっかけに、フィリピンでの体験がある。ずいぶん昔のことだが、フィリピン教育演劇協会（PETA=Philippine Educational Theatre Association）がマニラで行なう1週間程度のサマープログラムに参加した。スラムや被災した地区などさまざまな場所を訪れて、住民の方々と演劇をつくったり、

PETAの演劇ワークショップのメソッドを体験するというプログラムだったが、フィリピンの貧困コミュニティを次から次へと訪問した私は若干ナイーブになり、自分は何ができるのか、すべきかと自問自答していた。そんななか、PETAのコーディネーターが言った「自分たちは演劇の専門家として行動するだけだ」という言葉が印象に残った。

感情が揺れ動いた時、何かしたいと突き動かされるのはよくあることだが、それは自分の感情を収めるため、自分のためにやっているにすぎないのだとその時に思った。感情に動かされて瞬発的に何か事業を行なっても、劇場がそのエリアや課題に長期間にわたって向き合えないのであれば、その瞬間の打ち上げ花火になるだけである。ひとときの感情に依らない持続可能なプロジェクトとしていくためには、そのエリア・組織で起きている問題、必要なことなどを把握し、コミュニティに入って継続的な支援を行なっている専門家と連携を取る必要がある、そのことを強く意識するようになった。その上で、劇場は「演劇の専門家」として、協働パートナーは「それぞれの分野の専門家」として協働していくことが求められる。



対等な立場を求めて

協働する際には、対等な立場を保つことが必要だ。そのためには、協働パートナー候補から「主体的に申し込みをしていただく」ことが重要だと考えている。なぜなら、主体的に申し込みをすると、世田谷パブリックシアターの活動に関心を持った個人は、申し込みにあたって組織内での説得を行う必要が出てくるからだ。「来てくれると向こう（劇場）が言ってるから、とりあえず来てもらいましょう」ということを続けているだけでは、組織対組織で関係を対等に築いていくことにはつながらない。

こうしたことをほかの劇場やホールの方たちにお話をしていると、待っていれば申し込みが来るなんて世田谷パブリックシアターさんだからでしょう、と言われることも多い。しかし、私たちも始めからそうだったわけではない。劇場が区内の小中学校へ訪問する事業を始めたのが2003年度のこと、「区内施設連携プログラム」として小中学校以外の組織団体も意識するようになったのが2012年度のことであると考え、世田谷パブリックシアターが認知

され、一緒にやりたいと思ってもらうようになるまでにかなりの時間がかかっている。学校以外の組織と、単発ではなく継続的な関係を結べるようになってきたのは、本号で紹介している「だれでも表現クラブ・極楽」「だれでも写真クラブ・極楽」の活動が軌道に乗ってきたここ数年のことだ。しかし、こうして下馬地区での活動を継続できるようになったことで、活動を見ていただける機会も増え、現在は他地域の福祉法人などとのつながりも生まれ、各地域にも展開する動きが出てきつつある。

とはいえ、それでも演劇や演劇ワークショップについて知ってもらうのは難しい。世田谷パブリックシアターが行う演劇ワークショップでは、演劇をつくる体験を通して、集まった人々が互いの価値観や考えを交換し、共有し、相手を理解することを繰り返していく。そのプロセスは、人がコミュニティで生きる営みそのものともいえ、それを繰り返していくことで、コミュニティを豊かにする活動が持続的に続いていくはずだと私たちは信じて活動をしている。理想形にたどり着くにはまだまだだが、少しずつ、ようやく始めていけるような気がしている。

「だれでも表現クラブ・極楽」 「だれでも写真クラブ・極楽」 その始まりと実施一覧

2018年12月 別プロジェクトでシンガポール滞在中の学芸スタッフらが、現地の劇団ドラマボックスによる公団住宅でのアートプロジェクト“Both Sides Now”を視察。生と死をテーマにするプロジェクトに感化され、日本でも団地プロジェクトができないか検討を始める。

2019年10月 学芸スタッフが社会福祉協議会下馬・野沢地区事務局（以下、社協）の担当者と下馬都営アパート集会所で偶然、出会う。
社協と打ち合わせ開始。手始めに下馬地区会館で月1回の演劇ワークショップ「デイ・イン・ザ下馬野沢・シアター」を実施。

2019年度実施一覧

「デイ・イン・ザ下馬野沢・シアター」 進行 花崎 攝

2019
10.18 (金)
19:00~21:00

もみじより団子編

参加者 14名
「桃太郎」の物語をベースに、自分が桃太郎だったら地域の誰からどんな助けがほしいか？を考えて演劇に。子どもたちの参加もあり、幅広い層の「助けてほしい」場面が現れました。



2019
11.11 (月)
13:00~15:00

秋の思い出編

参加者 8名
生まれてからこれまで移り住んできた場所を思い出しながら、秋の思い出を「五行詩」にして劇を創作。それぞれの人生が色濃く劇に反映されました。

2019
12.16 (月)
13:00~15:30

額縁で彩る 思い出編

参加者 16名
自分の手が経験してきたことを話した後、自作の額縁の中で手を使って表現しながら発表。手の動きには、人の歴史が刻まれていました。



2020
1.9 (木)
13:00~15:30

新年の挨拶・帽子編



参加者 10名
「極楽」にいたとしたらどんな帽子をかぶっているかイメージして、それぞれ独創的な帽子をつくりあげました。

下馬双六を つくろう①

2020
2.10 (月)
13:00~15:30

参加者 8名
下馬の思い出をみんなで共有して双六をつくりました。つくられた双六には集まった人々の人生が描かれ、人の思いがけない歴史を知る機会ともなりました。



下馬双六を つくろう② 中止

2020
3.2 (月)
13:00~15:30

新型コロナウイルスのため中止
*2020年2月26日、政府よりイベント自粛要請が発表される



2020年度実施一覧

コロナ禍により4月から9月まで活動を中止しましたが、町会の方々からの声を受け、
2020年10月より「極楽」をキーワードに「表現クラブ」と「写真クラブ」を装い新たにスタート。
「極楽」には「ともに生きている人を見捨てない、自分を見捨てない」という意味があります。

だれでも表現クラブ・極楽

進行 花崎攝、長峰麻貴

10.7 (水)
14:00~16:00

秋の下馬双六つくり①

参加者 12名

「故郷の秋の思い出」を木の葉の形に切り取った色紙に書いて双六を創作。故郷を思い出するために、子どものときに食べた「秋の味覚」についておしゃべり。
木の葉には、子ども時代の記憶が書き込まれました。

4~9月
活動中止

11.4 (水)
14:00~16:00

秋の下馬双六つくり②

参加者 12名

10月に創作した「秋の下馬双六」で遊びながら、イナゴ取りが難しかったこと、栗の皮をむいて手が痛くなったことなど、さまざまな秋の思い出を語りました。会場近くで遊んでいた小学生も飛び入りで参加してくれました！

熊手づくり

参加者 11名

今年を振り返りながら熊手づくりに挑戦。彩り華やかな熊手には、自分が引き寄せたいものを描きました。

12.2 (水)
14:00~16:00

2021
1.13 (水)
14:00~16:00

万華鏡づくり

参加者 8名

中にあるパーツを揺らすとさまざまな模様が浮かび上がる万華鏡は、感染症によって制限される日々発想の転換をもたらすのではないかな。こんな思いから始まった万華鏡づくりは、それぞれのパーツを自分、家族、友達と決めて万華鏡の中に入れ、変化する形を見てみました。

だれでも写真クラブ・極楽

進行 金川晋吾

自分のテーマ・被写体を見つけましょう

参加者 12名

男性の参加を促すために始まった「写真クラブ・極楽」。写真を持ち寄り、写真にまつわるエピソードを話しました。取り壊し前の下馬団地の風景など下馬地区の歴史を物語る写真もあり、それぞれの時代をどう生きてきたのか、その記録を垣間見る機会にもなりました。

11.19 (木)
14:00~16:00

12.17 (木)
14:00~16:00

写真をプリントしてみよう。

参加者 13名

撮影した写真をプリントして、1枚1枚ホワイトボードに貼り出し、その写真についてざっくばらんにおしゃべりしました。

写真を介して個人の話を聞く、
演劇的な面白さも感じた会！



お話しましょう

参加者 7名

撮影した写真を見ながら「なぜ写真を撮るのか、写真とは何か」を話し合いました。また、進行役の金川さんが撮影した下馬団地の写真も見ながら、下馬に暮らす「今」の想いを共有しました。

2021
1.21 (木)
14:00~16:00



2021
3.25 (木)
10:30~16:00

番外編

参加者 8名

下馬地区に住む高齢者の方たちのポートレートを進行役の金川さんが撮影。被写体になることで、知らない自分に気づいてもらえたらと思っての企画です。みなさんの日常や人生を映すポートレートがたくさん記録されました。

紋切りをつくる

参加者 8名

魔除けや福を呼ぶと信じられ、江戸時代には身につけたり、飾ったりされた「紋」。今回はコロナ禍から自分を守るようなオリジナル紋を、お気に入りの形、色を決めながらつくりました。

2021
2.3 (水)
14:00~16:00



点と線の絵本づくり

参加者 9名

「オノマトペ(擬音、擬声、擬態語など)」を身体で表現した後で「点と線の絵本」づくり。感覚を使う作業は、いつもの自分とは違う自分を呼び覚ましました。

2021
3.3 (水)
14:00~16:00



2021年度実施一覧

引き続き「極楽」をキーワードに実施。

前半は単発、後半は連続ワークショップを企画しました。

だれでも表現クラブ・極楽

進行 開発彩子



2021
6.8 (火)
14:00~16:00

カラフルなパステル画を描こう

参加者 10名 パステルで自分の思い出を描きました。描いた作品がきっかけで過去のつらい思いを共有してくださる方がいるなど、アートが人の心を溶かすことを実感する時間となりました。

7.13 (火)
14:00~16:00

自分の格言手ぬぐいをつくろう

参加者 6名 自分が大切にしている言葉を考えて手ぬぐいを書いてみました。「朝、目が覚めたら生きてた!とホッとする」「しばらくは離れて暮らすコと口とナ つぎ逢うときは君といふ字に」といった言葉が。

スペイン語で描かれた Felicidad は「おめでとう!」という意味



人生の絵本をつくろう

8.10 (火)
14:00~16:00

参加者 4名 感情が動いた出来事、今の自分を形成した出来事、忘れられない出来事、信念などをワークシートに書いたあと、パステル画を描いて本をつくりました。



「人生モバイル」をつくろう

いつもとは違う自分を発見するために、モバイルづくりの前にいろいろな質問を投げかけ、みんなでおしゃべりしました。そのおしゃべりをヒントにモバイルの形を考えていきました。

2021
12.2 (木)
14:00~16:00

自分の色、形を見つける

参加者 7名 [質問] あなたのイメージカラーは? あなたを動物(植物)に例えると? なりたい生き物は? 思い出の場所は? 好きな食べ物は? ...など。絵を描いてモバイルづくりに挑戦。



枯れ木に花を咲かせよう

2022
1.13 (木)
14:00~16:00

参加者 1名 針金とディップ液で花づくり。[質問] お正月に食べて美味しかったものは? あなたの好きな花(植物)は? あなたを花・植物・樹に例えると? 花や植物が出てくる歌で思い浮かぶものは? ...など。

枯れ木に花を咲かせよう

2022
2.3 (木)
14:00~16:00

参加者 2名 1月につくった花を枝にかざる。[質問] お正月に食べて美味しかったものは? あなたの好きな花(植物)は? あなたを花・植物・樹に例えると? 花や植物が出てくる歌で思い浮かぶものは? ...など。

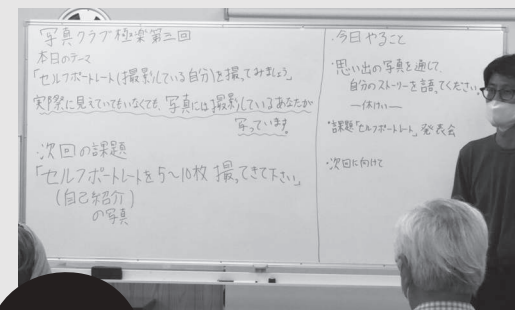
だれでも写真クラブ・極楽

進行 金川晋吾

「自分のテーマを見つけて写真展をする」ことを目標に据え、活動を開始!

2021
6.3 (木)
14:00~16:00

参加者 8名 自分の携帯電話の中にある写真から心が動く写真を選んで、どう心が動いたのかを話して自分のテーマ決めました。毎回、課題が出て、それを次回発表するという形式をとりました。[課題] 写真を3枚選んで日記をつける。



2021
7.15 (木)
14:00~16:00

参加者 8名 [課題] ①写真を3枚以上それぞれ違う日に撮る ②写真を撮った日の日記をつける

2021
8.19 (木)
14:00~16:00

参加者 8名 日記をそれぞれの声で録音しました。[課題] 写真展に展示する写真を選び、写真に合わせる。



2021
9.3 (木)・4 (金)
14:00~16:00

『極楽フェス'21』写真展示

参加者一人ひとりの人生について「生の声」が伝わるように、写真に込められた想いを録音し、特徴あるスペースで展示しました。



2021
6.17 (木)
14:00~16:00

参加者 6名 [課題] セルフポートレート(自画像)を撮る

2021
7.1 (木)
14:00~16:00

参加者 7名 [課題] セルフポートレート(自画像)を5~10枚撮る

参加者 7名 [課題] ①写真を3枚以上撮る(下馬団地の写真を意識する) ②日記をつける

2021
8.5 (木)
14:00~16:00

参加者 8名 写真に自分たちのテーマをつけました。「団地と猫」「観音さまと小さな宇宙」「朝のなかよし散歩」「私のペットたち」「大根根大地」「破壊と創造、再建と未来」など。



だれでも写真クラブ・極楽 写真日記編

進行 金川晋吾

『極楽フェス'21』で発表することで、さらなる意欲をもってくださったみなさんと、写真日記をテーマに活動を開始しました。さらに『地域の物語2022』の舞台でも作品を披露することになりました。

2021
11.18 (木)
14:00~16:00

参加者 7名 「年をとって感じることをテーマに参加者同士で話し合い、写真日記をつくるための手がかりを探しました。

2021
12.16 (木)
14:00~16:00

参加者 5名 それぞれ撮影してきた写真を投影しながら、日記を読み上げました。何気ない風景に見える写真も日記の描写によって写真の重みが変わりました。

2022
2.10 (木)
14:00~16:00

参加者 3名 「家の中」をテーマに写真を撮影して日記を書いてくる課題の発表。家の中で何を撮るのか、その選択もそれぞれの個性が際立ちました。

2022
2.17 (木)
14:00~16:00

参加者 4名 作品披露とともに、「老い」について思うことを共有しました。

2022
3.10 (木)
14:00~16:00

参加者 4名 作品を『地域の物語2022』（3月20日、シアタートラム）で発表するための準備をしました。「体験のない世界だなあ」と皆さん緊張の面持ちでした。

2019年度 「デイ・イン・ザ下馬野沢・シアター」

[主催]公益財団法人せたがや文化財団／社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局

[協力]下馬まちづくりセンター、下馬あんしんすこやかセンター

2020年度 「だれでも表現クラブ・極楽」10月7日 「だれでも写真クラブ・極楽」11月19日

[主催]公益財団法人せたがや文化財団／下馬まちづくりセンター／

下馬あんしんすこやかセンター／社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局

「だれでも表現クラブ・極楽」11月4日、12月2日、1月13日、2月3日、3月3日

「だれでも写真クラブ・極楽」12月17日、1月21日、3月25日

[主催]公益財団法人せたがや文化財団／下馬まちづくりセンター／

下馬あんしんすこやかセンター／社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局／NPO法人演劇百貨店

2021年度 「だれでも表現クラブ・極楽」：6月8日、7月13日、8月10日

[主催]公益財団法人せたがや文化財団／下馬まちづくりセンター／

下馬あんしんすこやかセンター／社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局／NPO法人演劇百貨店

「だれでも表現クラブ・極楽」12月2日、1月13日、2月3日

「だれでも写真クラブ・極楽」11月18日、12月16日、1月20日、2月10日、2月17日、3月10日

[主催]公益財団法人せたがや文化財団

[共催]下馬あんしんすこやかセンター／下馬2丁目北町会

座談会

福祉とアートが 手を携えて 地域の課題に アプローチする

下馬団地で高齢者を中心に多世代が集うワークショップである

「だれでも表現クラブ・極楽」「だれでも写真クラブ・極楽」。

ワークショップは、団地の住人たちが地域の記憶や

人生の記憶を持ち寄りながらお互いを知り合う居場所にもなっています。

本座談会では、ワークショップが生まれた背景や経緯を

プロジェクトの主催者に伺いました！



中尾有紀子

世田谷区社会福祉協議会職員



大塚一恵

下馬あんしんすこやかセンター職員



恵志美奈子

世田谷パブリックシアター学芸



偶然の出会いからの連携

恵志◆2019年に、別のプロジェクトでたまたま訪れていたシンガポールの団地で、「Both Sides Now」という“生きること、死ぬこと”をテーマにしたアートプロジェクトを目撃したんです。それがきっかけになって、日本でも団地でのアートプロジェクトを企画したいとずっと思っていました。高齢化や孤立などの課題を抱えた「団地」は、これからの日本社会の縮図だとも思っていましたから。そうしたときに偶然、三軒茶屋近くの団地で高齢者が毎週、紙の灯籠づくりをして福島に送っている会があると聞いたんです。社協さんに場所を伺おうとお電話したら、その灯籠づくりは池尻の団地での活動だったのですが、なぜか下馬の団地でやっていると言われて。行ってみたら灯籠づくりはしてないので、なにか違うぞ?と思いつきながら、受付の皆さんと噛み合わないやりとりをしていたら、「若い人はいいわね、ともかく入りなさい」と促されて……。おやつとお茶をいただいて、様子を伺っ

は住民の方たちが立ち上げたコミュニティサロンなんです。現在、下馬団地では建て替えが進行中なのですが、建て替えによってご近所づきあいが失われてしまいました。というのも、下馬に住み続けることを選択された住民の方たちは、建て替え後、住む棟を抽選で振り分けられることになったので、それまで棟ごとにおつきあいのあった隣人がバラバラになってしまったんですね。それをどうにかしなければ、と住民が発意して「和楽」が生まれたんです。

恵志◆迷い込んだ勢いで「和楽」に参加したのですが、おじいちゃん、おばあちゃんが大勢いらして、みんなで歯のケアのお話を聞いたり、「青山山脈」とか歌ったりしていました。広い和室の集会所で、その様子が妙に昭和な感じでおもしろく、こういう方たちが劇場でのワークショップに参加してくださるといいなあと見ていました。でも、みなさんが劇場にいらっしゃることはないだろうとも思いました。下馬団地から劇場までは1キロくらいの距離なんですけどね。世田谷パブリックシアターがあることもご存知ないだろうと。文化施設から外に出て行なう活動のことを、アート業界では「アウトリーチ」と呼ぶことが多いんですけど、世田谷パブリックシアターでは、そうした劇場外での活動をアウトリーチと呼ばないんです。演劇が行なわれている場所はどこでも劇場になり得ると思っているので、劇場という場所を中心に据えてアウトする、というイメージがしっかりこないからです。福祉業界の方たちのアウトリーチへのイメージとは、また違うのでしょうか。また、外に出て活動をする場合は、その活動が打ち上げ花火で終わってしまわないように、その場所の問題や課題に継続的に寄り添っている団

体と連携することが重要だと思っています。そのため、私たちは連携できる相手を見つけてから外に出て活動を行うようにしているので、「地域連携プログラム」と呼んでいるんです。今回であれば、中尾さんの社会福祉協議会や、大塚さんたちの地域包括ケアセンターが連携先になります。団地でアートプロジェクトをやりたいと思っていたときに偶然、みなさんとなつなごうことができました。**中尾**◆連携するとなれば、私も組織の上の者に話を通さないとけないので、恵志さんに世田谷パブリックシアターはどんな目的で地域での活動をされているのかを伺ったんです。そうしたら、「演劇と一緒にするには、一緒にいる相手に自分のことを伝え、またその相手の考えや思いを受け取らなければならない。演劇を通じていまでも知らなかった隣人に少しでもふれ、そうして地域の人がつながって、自分の知らない誰かを受け入れることのできるコミュニティをつくっていく、それをやっていきたい」と仰ったんですね。それは、引き篋もりや高齢化など団地が抱える課題解決にもつなごうていくはずだと。それを聞いて、まさしく私たちと同じだって。アートと福祉、それぞれのアプローチ方法が違っただけで、同じ目的を目指せるということが早い段階でわかりました。

表現を通して他者を知る

恵志◆中尾さんと話し合いを重ねて、まずは気軽に参加できる単発の演劇ワークショップを行なうことにしました。実施場所は下馬地区会館で、「デイ・イン・ザ下馬野沢・シアター」と名付けました。「デイ・イン・ザ・シアター」は、世田谷パブリックシアターが劇場への入り口のプログラムとして設定している2時間の演劇ワークショップで、そこ

からインスパイアされています。参加者の募集は、チラシをつくって団地の掲示板に貼ったり、中尾さんや大塚さんのところに相談にいらした方にチラシを手渡してもらったりして告知を進めました。そうして「デイ・イン・ザ下馬野沢・シアター」は月に1回、2019年10月から2020年2月まで4回実施しました。**中尾**◆ワークショップでは、初対面の方々がお互いの話を聞き合っ、一つの物語をつくっていく姿を見て心が動かされました。部屋の大きさもあり、人数は限られていたんですが、小さいお子さんからご高齢の方まで、多世代交流の場にもなっていました。初めて参加された子育て中の女性は、ふだんは言えない自分の意見を周りの人たちが否定せずに聞いてくれたことがすごく嬉しかった、そんな感想を仰っていて、子育てが大変な時期の女性にとってもこの場が機能するんだと思いました。特に印象的だったのが、団地に独居されている30代の男性が参加されたときのワークショップです。この方は団地の建て替えの際、手続きが

できなくて一人だけ棟に取り残されていたことがあったんです。私たちが気づき、引越しは無事にできたのですが、同じようなことが起きないように地域の方とつながりをもってほしいと思い、この男性をワークショップに誘ってみました。その回のワークショップは「自分の手が経験してきたこと」がテーマでした。経験をグループで話したあとで、自分たちでハギレをつけたり、色を塗ってつくった額縁の中で、その物語を語りながら手で表現する、ということを行なったのですが、彼は自分がアルバイトをしてお金をもらったときのことを表現していました。ワークショップにはその男性のお母さん世代の方も参加されていて、彼女たちは自分たちの子育てを手で表現していました。小さい子どもの手をずっとつないでいましたとか、子どもに着させるお洋服をチクチク縫いました、とか。息子世代であるその男性はすでに母親を亡くしているんですけど、二人の話を聞いて、自分も母親に苦勞させてしまったとか、そんな会話が生まれていました。こういう取り組みがなければ、



起きなかった会話ですよ。話を
してその人の人生のいち場面を共有し、
そこからつながりが生まれたんです。
非常に深い取り組みでした。

大塚◆その30代の男性ですと、ま
だお若いこともあって制度の目から
こぼれてしまいやすいんです。私た
ち地域包括支援センターが担当する
のは65歳以上の方なので、どうし
ても目が行き届かない。中尾さんは
その方を見つけて地域とつないでく
れました。誰かがその人を気につ
けてくれるだけでつながれるんです。
中尾◆その方はその後、ワークショ
ップには参加されていませんが、そ
こで町の方とつながったことで、ス
ーパーで会ったときには町の方と会
話を交わし、今では地域活動を行な
っているようです。

恵志◆誰かほかの人を気かけると
いっても、その方のことを知らない
と気にかけることって難しいですよ
ね。でも、こうしたアートプログラ
ムを通じて、自分のことを話し、誰

かの話を受け止め、表現すると、そ
の誰かが急に近しく感じるようにな
ると思うんです。アートの効能だと
思います。

「デイ」から 「クラブ・極楽」へ

恵志◆「デイ」は2020年4月から再
開予定でしたが、コロナ禍のため
に2020年の4月から9月までは中
止になりました。ですが「家にひき
こもっているだけだと心身の健康を
害してしまうので可能な範囲で開催
したい」という町会の方々からの声
を受け、2020年10月から和楽か
ら場所を変えて下馬団地の集会所で
再開することになりました。その
際「デイ・イン・ザ下馬野沢・シア
ター」はカタカナすぎで、長すぎで、
親しみにくいと言われてしまったの
で、「だれでも表現クラブ・極楽」
「だれでも写真クラブ・極楽」と名
前を変えて月2回、行なうことにし
ました。タイトルの「極楽」は、進

行役の花崎攝さんがアイデアを出し
てくださったのですが、そこには
「ともに生きている人を見捨てない、
自分を見捨てない」という教えがあ
るそうです。私たちが目指している
社会を表す言葉だと思って、私たち
も気に入っています。町の方たちも、
提案したとき「あ、いいわね!」と
言うていただきました。

大塚◆コロナ禍というのはすごく痛
いんですけど、これまで続けてきた
ことはすごく意味があると思います。
一過性のイベントではなく、毎月続
けることで居場所にもなります。

恵志◆月1回の実施でも居場所にな
るのか、やる意味があるのだろうか
と考えたときもあったのですが、カ
レンダーにその日を書き込んで楽し
みにする、その時間もワークショップ
の時間の一部だから月1回は1日
じゃない、そんなことを大塚さんに
言うていただきました。日々の生活
の時間のなかに組み込んでいただけ
るなら嬉しいですね。



「極楽クラブ」発 豊かな地域社会へ

大塚◆下馬団地は町会や団地の自治
会がしっかりしています。地域の見
守りも連携が取れていて、この間も
ある方の安否確認で町会長さんに電
話をしたら、ちゃんとその方の状況
はわかってくださっていて、大丈夫
だよって。それくらいすごい町会な
のですが、やはり若い人がいない。
下馬地区の高齢化率と比較しても、
団地だけ取り出すとより高い高齢化
率になっています。精神障害のある
方や独居の方もいて、この先、介護
保険だけではカバーしきれない部分
が出てきます。だから地域の助け合
いでなんとかしなくてはって中尾さ
んと話してきたのですが、「役割」
のなかでつながりをお願い「したり
／されたり」するようなあり方だと
限界があるんです。そんななかで私
が演劇というアプローチに可能性を
感じるのは、その人がふだん担って
いる「役割」を剥がし、ふだんとは
違う顔を引き出すところです。役割

を剥がされたときの顔で人と接する
と、自然に人とつながれるというか。
これは私たちにはできないアプロ
ーチです。

中尾◆いつも「会長」と呼ばれる町
会長さんや、民生委員さんなどもワ
ークショップだとニックネームで呼
ばれるでしょう。そうするとご本人
もその場では違う面をみせる。みな
さん、そういう自分が心地良いから
参加されていると思うんですよ。

恵志◆演劇ワークショップは、「新
しい関係性をそこでつくる」ことは
得意かもしれません。

大塚◆地域の超重要人物さんのこと
も、あだ名でかわいく呼んでおられ
ますよね(笑)。そういう役割を超
えた深い交流をしているうちに、気
がついたらつながりができていたと
なれば地域も変わると思います。こ
れからは高齢者のほうだけ向いてい
てはだめで地域全体を見ることが必
要です。お子さんとか若い世代、働
いている世代にも届くようなつな
がりになっていくといいなと思ってい
ます。

中尾◆社会福祉協議会は子育て世代
の支援も行なっています。そうした
世代への支援と、あわせて高齢者や
障害者の方と関わりを深める多世代
交流も期待しています。

恵志◆演劇ワークショップのいちば
面白いところは、違う人たちが共
同作業をしていくところだと思っ
ています。そこには正解はなく、一人
ひとり違う考えで生み出したものを
認め合いながら進んでいくわけです。
その過程で誰かを受け入れるとか、
違っていてもなんとか一緒に関わり
合っていくやり方を獲得していくわ
けですけど、そういうことが「極楽
クラブ」でも起きていたと思います。
クラブが終わったあともそれぞれの
日常のなかでもそんなふうに人と関
わっていけたら、豊かな地域社会に
なっていくのかなと。そして、そこ
に違う世代をもっと取り込んでい
きたいなと思っています。

(2022年1月14日収録)



人と人の新たなつながりの端緒

花崎 攝

「だれでも表現クラブ・極楽」は、地域の課題、特に世界一の速さで進行する高齢化に伴うコミュニティの課題に、劇場としてどのようなアプローチができるか取り組んでみる試みだ。それは、月に一度のワークショップを通じて、地域の人たちと少しずつ顔馴染みになるところから始まった。

当初、このワークショップは「デイ・イン・ザ下馬野沢・シアター」と名付けられた。でも、カタカナでは高齢の方たちに届きにくい。直感的に「極楽」という言葉が浮かんだ。果たして適切なのか？ リサーチする過程で「極楽の教え」には「共に生きている人を見捨てない」ということだけではなく、「自分を見捨てない」という教えもあることに出会った。これはいいと思った。「孤独や孤立」は現代を生きる私たちみんなの課題でもあるからだ。こうして「だれでも表現クラブ・極楽」と名付けられた。

「だれでも表現クラブ・極楽」の初年度では、美術家の長峰麻貴さんと「人生双六つくり」や「秋の下馬双六つくり」といったプログラムを進行した。そのプログラムでは、戦後の激動期から高度経済成長時代を生き抜いた参加者の記憶の断片から双六をつくった。その過程ではイナゴ取り、木登りの思い出や防空壕の話などが語られ、知人でありながらそれまで語ることのなかった思い出を交換したり、それまでの距離がグッと縮まったりした。

Yさんとの出会いは忘れられない。お連れ合い

を亡くされたYさんは、初めて参加されたとき声もか細く、とても弱っておられた。でも、手を動かすのがお好きだったようで作品づくりに集中されたり、お話を伺ったりして回を重ねるうちに、みるみる生きる力を取り戻していかれた。日本人と結婚された娘さんを頼って来日されたペルー出身のIさんも、日本語は不自由だが、楽しそうに絵を描いたり、絵本をつくったりしてその場に馴染んでおられた。娘さんにとっても安心してお母さまを預けて、ひと息入れられる時間となった。90代のHさんからは、戦争末期に木製の戦闘機、ゼロ戦をつくっておられたという歴史的な証言が飛び出し度肝を抜かれたが、引っ越して間もないHさんにとって地域の知り合いを見つかる機会になったようだ。ワークショップは毎回、創造的なエネルギーが漲り、参加者たちの豊かな経験が垣間見られる貴重な時間となった。アートというフレームを通じていつもと違う視点を導入することで、日常に埋め込まれたヒエラルキーを緩め、窺い知れない個々の経験や思いを分かち合う時間は、相互リスペクトの芽を掘り出し、人と人の新たなつながりの端緒になり得るという手応えを感じた。

はなさき・せつ／劇団黒 TENT で、フィリピンなどアジアの民衆演劇に出会い、国内外で演劇ワークショップをベースとするプロジェクト型の演劇活動を継続的に展開中。世田谷パブリックシアターでの企画・進行多数。

かったのは？」「あなたを花に例えるなら？」「丸、三角、四角。あなたを例えるとどの形？」など。おしゃべりを通じて作品のモチーフのイメージが広がったのではないかと思います。

初回はパステル画で鳥のモチーフをご自身の人生に想いを馳せながら描いて頂きました。80代の方が大半でしたが、無邪気ともいえるような意欲に驚きを覚えました。一緒にこの場を楽しもうというエネルギーが部屋中に満ち満ちていました。針金などを使った立体作品をつくった回では「こんなの初めてやったよ！」と扱ったことのない素材に新鮮さを感じて頂けたようでした。

今回の造形ワークショップを通して見えてきたことは、創作と記憶の強い結びつきです。色や、素材の質感に触れ、手を動かしているうちに思い出が紐解かれていく瞬間を度々目にしました。

これまで強く生き抜いてきた人生の無数の物語をひとりの身体に内包していると思うと、途轍もない思いがしました。かたや「大変なことばかりで美しい思い出なんてないの。今がいちばんいい」とお話してくださる方もいました。どんな年代の人だって今を生きているんだ、という気づきもありました。

例えば朝顔の花一輪を描いたとしても、その人の人生が表れてしまうものが創作物なのだと思います。今回のワークショップで生まれた作品が語る物語は、人生賛歌のように私には感じられました。

かい はつ・あやこ／世田谷パブリックシアターで行われている様々なワークショップに進行役・進行アシスタントとして参加。フォーラム・シアター作りにも積極的に参加するほか、美術の手法を使ったワークショップも手がける。

写真と日記はすべておもしろい

金川 晋吾

「だれでも写真クラブ・極楽」では、写真を撮ることに加えて、その写真にまつわることを日記として書くということを参加者のみなさんと行なっています。

ほぼみなさんスマホで写真を撮られているのですが、スマホだからこそ、生活に密着した、その人らしさが表れた新鮮な写真が撮られていると思います。また、日記を通して語られる参加者の日々の出来事や心の動きの描写もそれぞれの個性が表れていて本当に素晴らしく、私は毎回一人の観客としてとても楽しみにしています。毎朝の散歩のこと、その散歩の最中に太陽が昇って来てその日差しに感動したこと、足を怪我したら子どもたちが休憩用のソファを買ってくれたこと、カレーをつくったこと、実家の広島まで青春18切符で往復したこと、手術するために入院したこと、入院のベッドから見えた柿

の木にいろんな鳥たちがやってきたこと、アゲハ蝶が同じところに何日もじっとしていたこと等々、撮られているものや語られていることは多岐にわたるのですが、みなさん感情豊かに表現されつつもどこか飄々としているところがあり、それを老境のなせるわざと言っていいのかはよくわかりませんが、私個人はそこにとても魅力を感じています。

写真も日記もどうしたってその人らしさが表れてくるものであり、だからこそすべての写真、すべての日記はおもしろいと私は思っているのですが、「だれでも写真クラブ・極楽」のみなさんのおかげでその思いはより強まりました。

かながわ・しんご／1981年、京都府生まれ。写真家。2010年に三木淳賞受賞。18年にさがみはら写真新人奨励賞を受賞。写真集に『father』（2016）、『犬たちの状態』（2021）など。

まるで人生賛歌

開発 彩子

今回のプログラムは前半がおしゃべりタイム、後半が制作、最後に作品発表という構成にしま

した。おしゃべりタイムでは私の用意したお題に答えて頂きました。「お正月に食べて美味し



参加者に感想を聞きました！

Tさん（「だれでも写真クラブ・極楽」参加者）

写真クラブに興味があって、お友達を誘って参加しました。最初は、自己紹介がいやでいやで（笑）。これがなければねー、と言っていました。日にちが経つにつれて、お馴染みにさんになれば、話もできるようになって。お題を出されてパツと話すって苦手だったけど、誰かがちょっと話してくれると話せるようになりました。今がいちばん楽しいです。

Iさん（「だれでも写真クラブ・極楽」参加者）

このクラブのいいところは、携帯のカメラで写真を撮って楽しめること。学校と会社の写真部に所属していた経験があるのですが、ここでは「写真と日記」で一つの作品になるのがいいですね。写真の楽しみ方っていろいろあるんだなってあらためて。メンバーがご近所さん同士だからほかの方の作品を真似して、同じ場所で撮影することもできるでしょ。身近な人から刺激を受けましたね。

Tさん（「だれでも表現クラブ・極楽」参加者）

2年くらいお世話になっています。最初に参加したときから世田谷パブリックシアターのみなさんの温かさを感じました。知らない場所に来たという感じがなくて、みんながスムーズにすーっとその場に溶け込んでました。作品をつくるのもすごく楽しかったです。自分では幼稚園の生徒みたいな絵だな〜と思って、先生は色の一点を見て褒めてくれる。伸ばしてくれる。みんな帰るとき、嬉しい気持ちになるんです。喜びがありました。この灯りを決して消さないでほしいです。

Eさん（「だれでも写真クラブ・極楽」参加者）

現在、2回目の心臓手術を控えていて、コロナ禍なのでどこにも行けずイライラしています。でもこの状況に耐えて、人生100年の時代だから、第二の人生をスタートさせたいと思っています。そのときはやっぱり、写真をやりたい。テーマを決めて、コメントなんかもつけて。写真クラブは、写真を通じて個性が際立つのが面白かったですね。人と巡り会えた貴重な時間でした。

Hさん（「だれでも写真クラブ・極楽」参加者）

あなたは写真を撮るのが下手だから、行ってみたら？ と妻から言われたのがきっかけです。思っていたのとは違いましたが、人が撮った写真に影響を受けて、歩いているときでも周りの風景が気になるようになりました。プロのように撮れませんが、自分の個性で写真を撮るという新しい視点からちょっとした気づきをたくさん得ました。みんなで共有できるのがいいですね。

Yさん（「だれでも表現クラブ・極楽」参加者）

家内を亡くして1年10ヶ月になりますが、いまだに心にぽっかりと穴が空いています。少しでも誰かと話さないと、と思って、参加しました。手を動かすことは好きだったので、モノをつくって夢中になっている時間は救われました。哀しみはなくならないけれど、みなさんと話すことで癒された時間もありました。でも寂しさ、哀しさ、表現できない私だけのこの気持ちは、死ぬまで消えないですね。表現クラブがなくなると嬉しいですね。

Sさん（「写真クラブ・極楽」参加者）

友達に誘われてきたけど、最初は嫌でした（笑）。みんなの前で会話するのが苦手で。ただどなにか、惹かれるものがあったんです。写真を撮る感覚、写真クラブで覚えました。テレビを見ていても、これを写真に撮ったらどうだろう？ って、そんな日常になっています。いまだにドキドキするときもあるけど、誘っていただいて本当によかった。上手く言えないけど感謝感謝！

赤理文子さん（下馬あんしんすこやかセンター）

下馬2丁目近隣の住人が、何気ない日常を写真に撮って持ち寄り、写真家の先生がその写真について語り、学ぶ。口の重い男性が照れながら、ご自分が撮った写真に日記ぶうの語りをしてください。この方はこんな側面があるんだ、と感心させられました。温かいまなざしや傾聴する姿勢が育む安心な空気の中でさまざまな生活が語られ、それが一つの演劇として完成する。究極のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）です。

伊藤明美さん（下馬あんしんすこやかセンター）

「だれでも表現クラブ」ってなにをするのだろう、始めはそう思っていました。するといつの間にかパブリックシアターのみなさんは地域の中に溶け込み、人々の日常と歴史を作品に仕立て上げ、パフォーマンスによってその思いを表現されていました。関わった住民の方々に笑顔が広がり、なんらかの気づきと変化がもたらされたことを私たちは確信しています。



近日開催予定の主なイベント・ワークショップ

『デイ・イン・ザ・シアター

～大人の階段登る。卒業の日は満開の桜吹雪編～』

日程…(1)〈だれでもデイ〉2022年3月26日(土)13:30～15:30

(2)〈おとなデイ〉2022年3月26日(土)17:00～19:00

対象…(1)未就学:こども1名と、その保護者1名の2人1組、
小学1年生以上の方:お1人での参加可。
(2)18歳以上の方。

参加費…1人500円 進行役…大西由紀子(NPO法人演劇百貨店)

会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

3月は、「卒業」の季節…。学校だけじゃなくても、「卒業すること」「卒業したい」ことがあるかも!?
学業だけではない、「何か」から卒業する演劇を作ります。心に花吹雪、降らせてみませんか?



『ごちゃまぜ演劇ワークショップ2022

～はじめまして こんにちは!～』

日程…2022年3月27日(日)13:00～17:00

対象…小学生～22歳まで(2022年4月入学の新小学1年生は不可)

参加費…500円 進行役…とみやまあゆみ(NPO法人演劇百貨店)

会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

ごちゃまぜなみんなで、お話をしたり、聞いたり、身体を動かしたりしながら、
いっぱいいっぱい演劇を楽しみたいと思います!



『世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部』

日程…2022年3月28日(月)13:00～17:00

対象…中学生(2022年4月入学の新中学1年生は不可) 参加費…500円

進行役…大道朋奈(俳優、ワークショップ進行役)

会場…世田谷パブリックシアター 稽古場

いろいろな学校の中生が集まって演劇を作る場です。

学校の演劇部がなかなか活動できていない、学校以外の人と話してみたい、

とにかく何か新しいことがしてみたい。そんな中学生のみなさん、ぜひ劇場に遊びにてください!

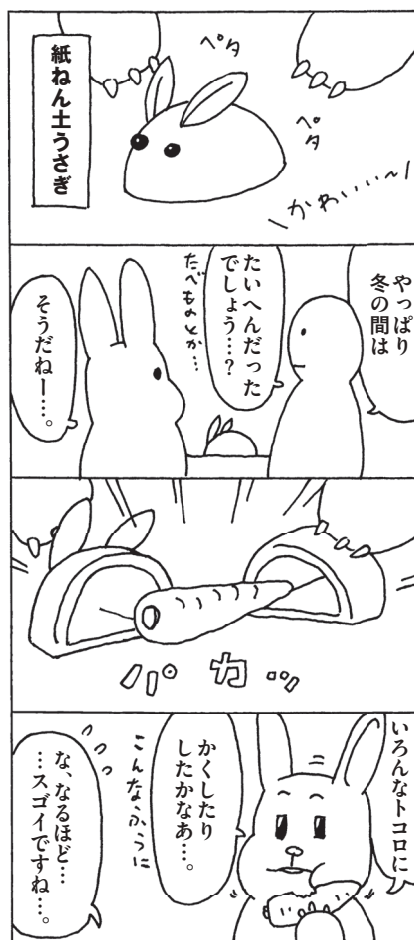


学芸スタッフから

★はじめまして。ようようです。「クラブ・極楽」で皆さんから色々なお話を聞きます。「一人で家にいると笑えないけど、ここは笑えていいね」「一日しゃべれないとね、声の出し方が分らなくなるんだよ」などなど。親の老後や自分の老後について考えます。私が100歳になったとき、人が集える縁側があるといいなあ。[ようよう]

★昨年からキャンプをはじめました。旅行好きなわが家、もともと宿泊費を浮かそうと気軽に始めましたが、その魅力に開眼。設営・撤収がとんでもなく疲れるので、一度行くともうやめておこうと思うのですが、しばらくするとまた行きたくなる、そしていろいろ道具が欲しくなる。予想外の大出費が続いています。[くたにん]

たまにはこんな役 #18



『キャラマガ』

Vol.18 / Mar. 2022

発行日

2022年3月22日

発行

公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
https://setagaya-pt.jp

編集

大谷薫子

企画

恵志美奈子、九谷倫恵子、
塩原由香里、石川恵理
(以上、世田谷パブリックシアター学芸)

協力

岡田陽子

デザイン

和田みさき

編集後記

久しぶりの「キャラマガ」、いかがでしたか。

偶然・偶発を大切にしている演劇ワークショップそのものの
ように、ひょんなことから生まれた「だれでも表現クラ
ブ・極楽」「だれでも写真クラブ・極楽」は、世田谷パ
ブリックシアター(以下、セタバブ)の「区内施設連携プロ
グラム」として行なわれました。「区内施設連携プロ
グラム」とは、セタバブが地域に出て行なう活動のことで
す。一般的にこうした活動はアウトリーチ(外へ[out] 手
を伸ばす[reach])と呼ばれますが、セタバブではそう呼
びません。それは「演劇が行なわれるところはすべて劇
場になる」というセタバブの信念の現れであると同時に、
劇場が地域に出て行なう活動が「その場限り」にならな
いよう、地域と連携することで「持続的な活動を目指す」、
そのミッションの現れでもあります。

豊かな地域を生み出すために「アート」と「福祉」が手を
携える。両者は違うジャンルでありながら、今回のプロ
グラムでとても自然に連携していたことが、本号に収録し
た座談会(P11-15)からは伝わってきます。日々、個々の
あり様に対してサポートをされる福祉の方と、個々の日常、
それぞれの個性からWSを立ち上げる劇場学芸の目線は、
もしかしたらとても近いのかもしれない。
違うジャンルでありながら自然に手を携える、そんな豊か
な関係とまた出会えますように。[かおるこ]

デザインコンセプト・マンガ

株式会社ウチカワデザイン

印刷・製本

株式会社リヒトプランニング

後援

世田谷区



文化庁文化芸術振興費補助金
(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区が作り、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター（約600席）、シアター・トラム（約200席）の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。

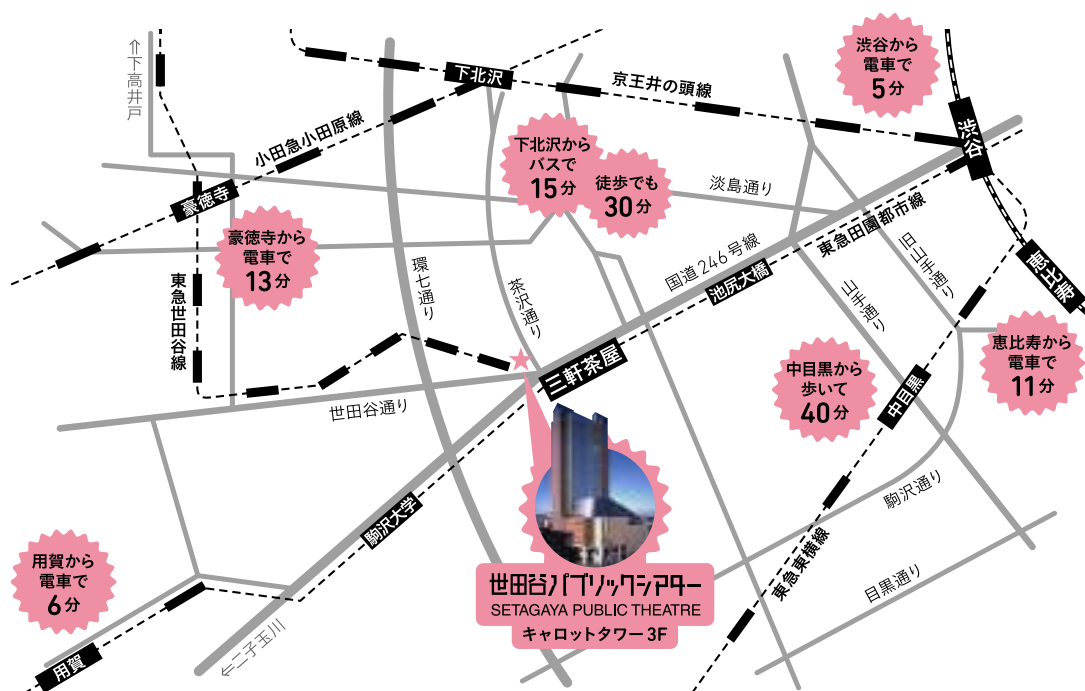


世田谷パブリックシアター（主劇場）



シアター・トラム（小劇場）

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷ノボリツクシマー

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー 5階

Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559

<https://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。